

会員 企業紹介



海上保安庁・海上保安監
第30期
奥島 高弘

高校時代、海上保安庁（以下「海保」と言います。）ではなく、教師になろうと思っていた。海保に入ったのは、同級生が海上保安大学校を受験すると聞き、「じゃあ私も」とさしたる主体性も無く受験したのがきっかけです。勿論、今ではその同級生に大いに感謝しています。因みにその同級生は教師になりました。人生は分かりません。

さて、海保は、海上の安全・安心を担う役所で、警察と消防を足したような、海のよろずや的存在です。活動の舞台が海上なので、一般の方の目に触れる機会はこれまで少なかったと思いますが、平成14年から始まった映画・TVドラマの「海猿」（海保の潜水士が主人公）で大きく脚光を浴び、認知度も上がりました。業務面で広く知られるようになったのは、次の三点かなと思います。

一つ目は平成13年の九州南西海域工作船事件です。北朝鮮の工作船と海保の巡視船が銃撃戦になり、工作船が自爆して自沈しました。日本周辺の海が必ずしも平穏でないことを知らしめた大きな事件でした。

二つ目は尖閣諸島の領海警備。平成24年に尖閣諸島を国有化して以降、中国の法執行船が荒天の日を除き毎日尖閣諸島周辺海域へ来航し、領海侵入も繰り返すという異常な事態が続いています。これを今現在も最前線で防いでいるのは海保の巡視船です。

三つ目は、日本海における北朝鮮漁船の違法操業事案です。とにかく隻数が多いので巡視船の放水銃を使って、日本の排他的経済水域から追出し、侵入を防ぐことを第一に対応しています。実はこの放水銃はかなり強力で、消防車10台分に相当するものもあります。加減をしないと木造漁船を沈没させるので、力加減にも気を使うところです。

海保はこれまで、救助機関としての役割が大きかったのですが、近年は、警察機関としての役割が大きくなり、今や、我が国の安全保障の一翼を担うまでになりました。

非軍事機関である海保のような法執行機関が安全保障の一翼を担うことは、平和国家日本にとって大きな意味があります。

法執行機関は、本質的に国際法という共通のルールが支配する世界で活動するので、「力対力」の関係にはなりにくく、また保有する武器も相手

です。昨年は、こうした地域毎の取組みから、世界各国からの参加を得た「世界海上保安機関長官級会合」へと拡大しました。世界会合は、来年も日本で開催する予定です。

こうした海上保安機関の普遍化、標準化は、日本が世界を主導できる数少ない分野です。そしてその主役は海保です。日本を取り巻く安全保障環境が厳しい今、大変な時期でもありますが、国内外から大きな期待を寄せられる成長企業でもあります。

私は、その成長企業で「海上保安監」を務めています。海上保安監は、長官の補佐役でオペレーション（実動）部門の責任者ですが、政府



放水



ヘリ吊上げ



尖閣

の緊急参集要員でもあり、緊急事態、大規模事案発生時には、30分以内に官邸に駆けつけなければなりません。

このため、私は官邸から2キロ圏内の官舎に住み、土日を含め、外出も基本この範囲に限られています。かなり不自由な生活ですが、そういう不自由をしてなお、海保はやりがいのある魅力のある組織です。

現在、海保に桜陽卒業生は40名ほどいます。より多くの桜陽卒業生が、日本の安全・安心のため海保に入り、共に汗を流してくれることを願って、拙稿を終えたいと思います。



世界会合